
平井寿司物語

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平井寿司物語

【Nコード】

N2065L

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

イメージはマツコ・デラックスです。こんなんリアルであつたらマジ怖いなあ。。。

無料小説投稿サイト「小説家になっちゃおう」で平井寿司ひらいひさしは小説を書いていた。ペンネームは、クレ夫である。クレオパトラみたいに高貴な人物になりたいと連れに話したら「お前すぐ人に何かくれよくれよとたかるから、クレ夫でいいやん」と言われたので何となくそれにした。

クレ夫が小説を書き始めたのは何となくである。会社をリストラされフリーター生活を陰鬱に暮らしてるうちに、たまたまネットを漂っていたら、「小説家になっちゃおう」にたどり着いた。元々小説なぞ文字を見てたら目が痛くなるので好きではなかったが、漫画も描けないし、映画を撮る力ネもないので、ひとつ小説で日頃のうさを晴らすかと始めたのだ。

最初に投稿したのは「クレ夫、大暴れ」という短編である。会社を解雇されたクレ夫という青年がストレスを発散するために街に飛び出し、通行人を次々と包丁で刺すという夢も希望もない話である。当然、「なっちゃおう」の住人は真面目な人が多いので感想欄は批判の嵐であった。

「おまえが死ね」

「こっから出てけ」

「病院行け」

クレ夫は、少しブラックかなあと思っていたがなかなか自信作だったので落ち込んできた。

「ちっストレス解消のために書き始めたのに、これじゃあ逆にストレスがたまっちゃうよ」

もういいかげん止めちまおうかなあと思っていた頃、ユーザーページに一通のメッセージが入った。

「宮田里美??」

メッセージを開くと、クレ夫は思わずガッツポーズをとってしま

った。

クレ夫先生の作品は面白いです。確かにダークでクレイジーなところもあるけど、それってギャグには必須だと思います。これからもがんばって下さい。【里美】

クレ夫は早速里美のページに飛んだ。『雪大魔王』『黒き闇をまとった親爺』が連載されていたが、いずれもクレ夫の好みのホラーギャグであった。雪大魔王が、雪だるまになりごろごろ転がり、下で口を開けていた幼稚園児に食われてしまったというギャグなど、シユールすぎて腹を抱えて笑った。

「この人とは気が合う！」

クレ夫はさっそくメッセージを送った。

里美さんの作品面白かったです。ばく好みです。よかったらばくときき合ってくださいませんか？

クレ夫はちと頭がおかしかった。なぜそうなる。急すぎるがな。しかし、クレ夫はマジであった。フリーターは低所得すぎて結婚できない。女に飢えていたのである。

返信はなかなかなかった。そりゃそうだ。

クレ夫が、誰を刺そうかと街をうろろろしていたり、精神集中するために滝に打たれていたり、「もういいや」とあきらめかけたその時に、ついに里美から返信がきた。

ドキドキしながらメッセージを開くクレ夫。

はははは。クレ夫さんて愉快ですね。リアルでは恥ずかしくつき合えないけど、ネット上ではつき合ってもいいよ。【里美】

「うおー！やったー！ー！」

クレ夫はガッツポーズをとった。

それからクレ夫は明るくなった。バイト先のコンビニでもいい笑顔で接客するのでお客さんにも人気が出た。

「寿司くん。最近調子いいね。女でもできた？」

「いや、まあ。うふふふ」

クレ夫はとにかくガムシヤラに小説を書いた。無論、内容は麻薬、エロ、バイオレンスといった類いなので読者からは「早く死ね」の大合唱だ。でも、知ったことが。クレ夫は里美を喜ばしたい一心で書きまくった。

それが里美にも伝わってきたのだろうか。ある日、里美が急にクレ夫に会いたいとメッセージで言い出したのだ。

クレ夫は正直焦った。メッセージのやりとりで、イケ面のような振る舞いをとっていたのだ。しかし、リアルの彼はメタボリックで顔はニキビでぶつぶつで、きもいヲタという風体である。

しかし、かまうものか。里美さんに会いたい。クレ夫はプリン駅で待ち合わせしようとメールした。ちょうどクレ夫の家の最寄りのプリン駅から電車で30分くらいのところに里美が住んでいたのだ。クレ夫は当日、うきうきしてプリン駅の改札口で待っていた。ピンクのタキシードを着ていた。メタボリックなのでぴちぴちである。通行人がじろじろ見てる。ちよつと恥ずかしい。しかし、こうすれば目立って目印になる。里美にもそのことをメールしていた。

時計を見る。もうすぐ来るころだな。

「クレ夫くーん」

改札口の向こうで、ピンクのキャミソール、ピンクのスカートをはいた、メタボリックな女性が手を振ってる。

「げげ」

「クレ夫くーん。あたしよー。さ・と・み」

声が低い。女装したおっさんや。しかも、でぶ。

クレ夫は知らぬ顔をしたかったが、ピンクのタキシードを着ているのでどうにもならない。逃げ道なし。

「今、行くよー」

里美はメタボな体を揺らせながらどしどしと歩き、切符も入れないで、改札機のガードを突き破り突進してきた。

「ひiiiiiiiiii」

クレ夫はがたがた震えた。駅員が里美を止めにかかる。

「こらおっさん！改札機壊して、なんちゅうことさらすねん！」

「うつせえ。ぼけえ」

里美はものすごい力。あつという間に駅員を数人ぶっ飛ばす。頭を壁にぶつけ失神する駅員もいる。通行人は怖いので無視だ。なにしろ、里美はむちゃでかい。一人分の圧力じゃない。

「おまたせ。ダーリン」

里美はクレ夫の腕に抱きついた。

「いきましょ」

「は、はい！」

クレ夫は逆らうと殺されると思ったので、大人しく言うことを聞いた。

腕を組んでプリン市街に消えるでぶおっさん二人……。

こつから先は少年誌では放映できません。恐ろしすぎる。ホラーファンタジー……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2065l/>

平井寿司物語

2010年10月8日14時40分発行